

サンプル

なきむし先生

（終業編）

はしいろまんぢう

# 第一章 通信簿と万引き少年

## 1、通信簿に落ちた桜田愛の涙の理由

手暗がりの万年筆の先端に、たぶんしょっぱいだろう透明な水滴が、少し厚手の紙の上に、ポタツと音をたてて落ちた。いましがた書いたばかりの、『たいへんよくできました』のところに付けた黒いマルの一部が、青く滲んでしまった。桜田愛は、慌てて水色のパジャマの袖口で拭き取ったものの、もうその滲みは元に戻らなかつた。

「恵ちゃんごめん……。通信簿よごしちゃった。涙がいけないのよ……」

四季は毎年同じ速度で訪れるのに、通信簿の季節だけはそのサイクルとは別の軌道に乗って、あつという間にやって来る気がする。この間、二学期の通信簿をつけたばかりなのに、もう三学期のそれをつけなければならぬとは……。悩みの心は磁石のように、時間を超え



て引き寄せるものなのか？愛は半分迷惑めいわくそうに、山となっている生徒達の通信簿を見つめると、ひとつため息をついた。そのため息の色は、うんざりしたというものより、何か試練にぶつかった時の、成なす術すべもなく途方とほうに暮れたというようなものだった。

今の愛の心には、通信簿くらいの悩みなど簡単に呑み込こんでしまうほどの大きな影かげが、重たく心を覆おほい尽くしていた。今まで出合った事のない大きな影——。それはブラックホールのように、心に移りゆく感情や、視覚や聴覚ちようかくに映る全ての物を、無差別に吸い込むのであった。その代償だいしょうに、目頭めがしらに何か熱いものが潤うるんでくるのである。

愛は万年筆のキャップを閉じると、そのまま後ろに寝ころんで、蛍光灯けいこうとうを見つめた。

あの子の顔

この子の顔

夢見る瞳ひとみ、信じる瞳

みんな、あたしを見つめてる

小さな手、創造の手

彼らの掌てのひらが熱いのはなぜ？

生なま意い気きな口、正直な口

そして、唇くちびるは未来の扉とびら

彼らの成長はあたしの最大の願い

でも……

出会った日にはこんなこと

考える隙間すきまもなかった

今度の終業式の日

別れなければならぬなんて……

ため息は涙を誘った。目尻めじりをつたう涙は思い出を誘った。そして、恩師やましろうへいいちろう山城平一郎に教わった『教育』というものについて考えた。今、愛が教師をしている事の全てが、その涙の中につまっていた。

新任の教師として、長野県須坂市立岩燕いわつばめ小学校に配属されてから、早、三年の月日が過ぎようとしている。現在二十五歳、まだ独身。幸か不幸か愛が受け持った、当時三年一組の生徒達は、来春最長学年となる。しかし愛には数日前、同市立竜ヶ池りゅうががいけ小学校への転任の辞



令がくだっていた。

三年前の今頃は、夢にまで見た「教職に就く事」の実現で、見る物全てが美しく感じるくらい有頂天うちようてんだった。だが、今はそれとほぼ等しい大きさの悲しみが、彼女の心を締めつけていた。およそ人生には、喜びと同等の悲しみが、峠とうげの道のように存在するのかもしれない。出会いの喜び、離別の悲しみ……。

そんなことは知っていた——。

知っていて教師になつたのだ——。

いくら自分にそう言い聞かせても、生徒の顔が次々と邪魔じゃまをして、涙の泉は尽つきることを知らなかった。別れがこんなにも辛いとは……。

『サンハイツ』という名のアパート、B棟とう三七号室、愛の日常生活の空間は、白を基調とした六畳の小さな部屋だった。中央に、今は通信簿が山積みこたつみされてある炬燵こたつを置いて、それを足元に北側に頭を向けて寝ころんでいる愛。先程洗濯したばかりの下着類が、ヒーターの温風を浴びている。西側に十四インチのテレビがあり、その横の本棚ほんだなの上に置いてあるCDラジカセからは、ごく小さな音量でジョン・レノンが流れていた。四方の壁には、図工の時間に子供達が描いた『先生の顔』。目をつり上げていたり、口を三日月みかづきにしていたり。中でも、

眉はへの字でミミズの口に、点の目からは水色の丸がポロポロ溢れた顔は、今の表情と瓜二つの様な気がした。思わず愛は微笑んだ。その絵を描いた生徒に「なに泣いてんだヨ」と慰められた気がして、一瞬の喜びが表情に現れた。

思えば、初めて彼らと出会った時、あまりに思いどおりにならなくて、泣いてしまった事がある。その時ついた『なきむし先生』というあだなが、ある種の親しみを帯びて胸にこみ上げた。

もうすぐ最愛の子供達と別れなければならぬ。彼らはまだ、その運命を知らない――。

## 2、使命について考える

恩師山城平一郎校長は、『愛』こそが教育の神髄だと言った。理念的には理解できるが、それを実践するとなると『愛』ほど不可解なものはない。第一、『愛』は感情の一種であり、感情は常に変化を伴うものだからである。例えば愛と憎しみ、例えば喜びと悲しみ……、人の心は絶えずそれらの両極端を含有し、時と場合によって、ある特定の感情を現すものな